

業務展望レポート			
2	溝渕 大輔	所属名	香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課
		職名	主任社会教育主事

[1]研修参加の意義

- 当初のブリーフィングにおいて、ネパールに関する正確な情報を与えていただいた上で、ホームステイ体験や小学校訪問、NGO活動などの視察をすることができたので、見聞したことが印象としてではなく、確証に近い形で自身の知識となり、得るものが多かった。
- 若い青年たち(シニアの方も)が、外国の人々のためにボランティアとして一生懸命頑張っている姿を見ることができ、日本人として誇らしく思うとともにエネルギーをもらうことができた。
- 他県の参加者の方々と交流することができ、教育をはじめ、様々な事柄について情報交換をすることができた。

[2]海外研修全般に関する所感

今回の研修では、NGOの活動や小学校の教育活動の様子など、通常の旅行ではあまり知ることができない事柄について、知見を広めることができた。特にパトレケット村のホームステイでは、ネパールの人々の暮らしの一端を垣間見ることができ、この国を理解するための一助となった。私自身は家族4人が仲良く暮らすラビンドラ家にお世話になったが、短いステイ期間に様々な気づきを得ることができた。長女のラチャは、流暢な英語を話す利発な女の子であったが、カトマンズには1回しか行ったことがないと言っていた。長男のラミは、ホームステイの初日も2日目も同じグリーンの服を着ていたが(2日目は制服の下に)、去年この家を訪れた藤本さんとの記念写真の中のラミも同じ洋服を着ていた。決して裕福とはいえない経済状況の中で、家計を圧迫するにもかかわらず、良質の教育を受けさせるために2人の子どもを高額な私立学校に通わせている状況を知り、公立の学校教育の充実が急務だと感じられた。

また、帰国報告時の飯田所員の「JICAが支援できることは限られている。本当にアクセスが悪いところへは支援の手段がない。」という言葉も印象的だった。JICAの活動は、世界の隅々にまで展開しているようなイメージを持っていたが、そうではないということに改めて気づかされた。よく考えてみれば、当然なのだが、それを聞いたときには、誰にも知られず、支援を受けることもなく、想像すらできないほど悲惨な生活を送っている地域が世界のそこかしこに存在する絵が浮かんで来て、大きな衝撃を受けた。

ネパールが最貧国から脱却するためには、政治の安定とインフラの整備が必要だが、これらの課題が克服された時には、世界屈指の観光資源を有しているこの国は、出稼ぎ依存体質から脱却し、貧困からも脱け出し、豊かさを手に入れるかもしれない。しかし、その時には、ホームステイで見た子どもたちの甲斐甲斐しくお手伝いする姿や学校で見た子どもたちの勉強したいという強い気持ちは失われていくのかもしれない。決して現状のままで良いという訳ではないが、日本が先進国になっていく過程で失われていったものを同じように失ってしまうのだとしたら、どのような支援を行うことが良いのだろうか、いろいろと考えさせられるものがあった。

自由行動の日には、ヒマラヤフライトや寺院観光を堪能したり、通訳のラグさんのお宅で家庭のダルバートをご馳走になるなど、ネパール人のホスピタリティにも触れることができ、全日程を通して大変充実した研修であった。強いて残念な点を挙げるとすれば、学校訪問の機会に、授業の様子を見ることができなかったことである。教育関係者としては、授業のあり方はもちろんだが、それ以前に教師がどのような態度で生徒に接し、児童・生徒がどのような態度で応えているのかを見てみたかったという思いが強い。もう1点は、せっかく教育局の方々とのお会場の場を設定していただいたが、時間が短すぎて、十分な懇談ができなかったことである。相互に一方的な発表を行うことよりも、グループに分かれて話し合いをするの方がより充実した時間を共有することができたかもしれない。

個人的には、外国の人々の意識を変えていこうと頑張っている人々を見て、自分は県民を相手にしているのだから、「もっとできることがあるはず。もっと頑張れるはず。」という思いを強くさせられた研修でもあった。

[3]特に印象に残った視察・訪問先を3つ挙げ、その内容をご記入ください。

視察・訪問先	所感
JICAネパール事務所でのブリーフィング	ネパールの経済事情や教育事情、そしてこの国のもつ歴史的な背景を理解できたことにより、旅行者では見逃してしまったり、表面的にしかならなかつたと思われる事柄に対しても、しっかりと意識して捉えたり、認識を深めたりすることができた。また、ホームステイ先やNGO関係者、青年海外協力隊の方に対しての的を射た質問をすることができた。とりわけ、小泉企画調査員の講話には目からうろこが落ちることがしばしばであった。

パトレケット村でのホームステイ	1泊2日のホームステイでどれだけの成果が得られるだろうか？と当初は懐疑的であったが、思いのほか、ネパールの庶民の生活を理解することができた。夜には親子4人と長時間にわたり、話をする機会を得たが、事前のブリーフィングでこの国の平均収入などについても情報を得ていたため、どれほど無理をして私立学校に2人の子どもを通わせているかや、村には仕事がなく、やはり出稼ぎも考えていることなど、この家族が抱えている問題もよく理解できた。
テクのごみ中継地及びピスドル廃棄物処理場の視察	テクの中継地の脇でも、貧しい人々が独自にゴミの分別・売却をして収入を得ていたが、ここから26kmも離れ、しかも頻りに土砂崩れが起きる道を進んでいった先の最終処理場においても、貧しい人々がゴミの分別を行い、わざわざカトマンズに戻って売却しているということに驚かされた。ここでは子どもが作業に従事する姿やテントを張って暮らしながら作業している姿も見受けられ、考えさせられるものがあった。また、ネパールでは、ゴミのほとんどがリサイクル可能なものばかりであり、青年海外協力隊のメンバーがカトマンズ市内のゴミの分別プロジェクトを行おうとしている姿にも感銘を受けた。

[4]今後の業務における活用の可能性

海外を旅することが好きで、自身の専門科目である世界史の授業では、「異文化理解」に重点をおいて実施してきたつもりである。また、以前勤めていた社会教育施設では、担当した国際理解講座において、イスラームに対する偏見を払拭するために、外国のムスリムの方々と日本の高校生を集めて、書道や料理の交流を含めた1泊2日の「イスラーム理解講座」を開催したこともあった。学校現場に復帰した際には、今回の研修の成果を活かして、異文化理解を深める授業を充実させるとともに、旅行者としてでは得られなかった知識や経験も生徒に伝えていきたいと考えている。また、多くの青年が(シニアも)、熱い思いをもって他国のために奮闘している姿も併せて伝えていきたい。

現在は、香川県教育委員会の事務局職員であり、今回の研修も年次休暇を利用しての参加であるため、報告会など研修の成果を発表する機会の予定はない。また、社会教育を担当業務としているものの、直営の事業を実施する機会はほとんどなく、研修の成果を活かせる場面は少ないが、それでも、かつて担当事業において、国際交流事業を行う団体に対して、積極的に指導・助言をすることができたこともあり、今回の成果も現在の業務において活かせるよう意識を高く持って機会を捉えていきたい。

【ネパールで出会った人々】



パトレケット村の女性たち



ステイ先のラミ(左)とラチ



通訳のラグさん親子



似非サドゥー(修行者)たち